

第4回 四万十川自然再生事業検討会

議事概要

令和 7年 3月11日（火）

15:00～17:00

高知河川国道事務所 4階 会議室

1. 開会、2. 事務局挨拶、3. 委員紹介を行う。議題と各委員の意見は下記のとおり。

（1）前回の委員指摘事項に対する回答

- ・ 委員からの意見は特になかった。

（2）ツルの里づくりⅡ期整備とモニタリング計画及び実施状況について

- ・ Ⅱ期整備の目標として「ツル類をはじめとする希少種の保全」を掲げているため、ツル以外の野鳥の情報等も集めておくといよい。〔谷地森委員〕
- ・ 中筋川と堤内地の連続性が確保できているか、魚類が遡上できているかについて、堤内地の支流や水路に生息する魚類の種類や生息数をモニタリングすることで確認していただきたい。〔石川妙子委員〕
- ・ 中山地区では植生が発達しないように水位操作を行うとのことであるが、水深50cmではヨシ、ガマ類、マコモ等の水生植物が生育してくると考えられるため、対応方法を考えておいたほうがよい。〔石川愼吾委員〕

（3）アユの産卵場面積と資源量との関連性について

- ・ 産卵場面積と流下仔魚密度以外には、有意な相関がないことは妥当である。遡上数と漁獲高にすら有意な相関はないものである。〔木下委員(当日は欠席)〕
- ・ 浮遊期におけるアユの減耗は、水温ではなく餌となるプランクトン量の違いに左右される。プランクトン量は、湧昇流の沿岸域への接岸に伴う栄養塩量の違いにより変化すると考えられる。浮遊期以外の各成長段階での減耗にも年変動はあると考えられるため、アユの年変動の要因は不明である。〔木下委員(当日は欠席)〕
- ・ 置き土に伴い、河床の間隙にシルトが詰まっていないか気になる。これまでアユに限定して様々な調査を実施しているが、河床の間隙は底生動物等、他の生物にとっても重要な環境であるため、シルトや砂による河床の間隙の目詰まりについてもモニタリングしていただきたい。〔石川妙子委員〕
- ・ 産卵場面積に加え、流下仔魚密度も増加したことは、事業が成功していると考えてよい。今後も長期的にこのような状態が維持されるような維持管理が必要となる。〔石川愼吾委員〕

(4) アユの瀬づくりに係る維持管理(樹木管理)の進め方について

- ・資料に記載されているとおり、コストを抑えるためにも、ヤナギは幼木のうちに伐採・除根したほうがよい。[石川愼吾委員]
- ・ツルヨシもかなり繁茂しているが、ツルヨシは土砂を捕捉してマウンドを形成するため、除去する方向で検討していただきたい。除去方法は、直接除去以外にも、マウンドにトレンチ(溝)を掘って出水時に流出させるような方法等もあると考えられるため、岡田会長等の専門家に意見を伺いながら効果的な方法を検討するとよい。[石川愼吾委員]
- ・維持管理については、低水路を優先し、適切に実施することで、産卵場面積は大きく減少しないと考えられるが、高水敷の藪化した部分も、出水時に土砂を捕捉し堆積を促進させる。そのため、河床全体の管理を総合的に考えると、長期的には高水敷の切り下げも実施したほうがよい。将来的なビジョンとして対応を考えておく。[石川愼吾委員]
- ・現在の入田地区では、出水時の減水期でも滞筋に流れが集中しているため、上流側では流速が早く土砂は堆積せず、下流側に堆積しており、その結果として大墜付近でアユの産卵場が形成されている。上流側での樹木伐採により、出水時の滞筋への流れの集中が緩和され、広域での産卵場の形成につながる可能性があるため、伐採効果を検証できるようにデータを取得しながら、進めていただきたい。[岡田会長]

(5-1) スジアオノリの漁獲量と生育状況について

- ・委員からの意見は特になかった。

(5-2) しまんと海藻エコイノベーション共創拠点の概要について

- ・高知大学を代表機関として、学術機関、企業、四万十市、高知県が共同で科学技術振興機構の「共創の場形成支援プログラム (COI-NEXT)」に提案した『しまんと海藻エコイノベーション共創拠点』について、平岡委員よりご説明いただいた。

(6) コアマモ場の再生・創出に係る当面の進め方と今年度の調査結果報告について

- ・コアマモの生育面積が令和6年に減少しているが、コアマモには年変動があるため、そこまで深刻な状況には感じない。この状況が長期間継続した場合には危惧する必要がある。[木下委員(当日は欠席)]
- ・竹島川はコアマモが繁茂していた状況から、急速に衰退している箇所であるため、生育実態把握調査の地点に加えていただきたい。[木下委員(当日は欠席)]
- ・底質はコアマモの生育環境として重要な要素であるため、目視による記録ではなく、粒度分析を実施していただきたい。[木下委員(当日は欠席)]
- ・地点別の水温と塩分の頻度割合の整理結果については、各地点の特徴を表している。[木下委員(当日は欠席)]
- ・蛸瀬川では、20年前には、蛸瀬橋よりも下流側にもコアマモ群落がみられたが、現在はみられず、コアマモの分布範囲は上流側へ移動している。蛸瀬橋における満潮時の塩分が非常に高くなっているが、20年前は蛸瀬橋まで塩水くさびは到達しておらず、

四万十川と同様に、塩分動態も変化していると考えられる。[木下委員(当日は欠席)]

- ・ コアマモの分布域の変化は塩分の変化と密接に関係していると思われる。[木下委員(当日は欠席)]
- ・ 水温塩分の鉛直測定は、大潮と小潮時に実施していただきたい。[木下委員(当日は欠席)]
- ・ 最終的には、次年度の春と夏の調査結果を踏まえる必要があるが、令和6年に大島水道部でコアマモが激減した要因は、水温が30℃を超えたことによる影響が大きいと推測される。[石川愼吾委員]
- ・ 干潮時には、コアマモは干出し、太陽の光を直接浴びてしまうこともある。コアマモの根茎が高温に弱いということを踏まえると、干出が大きな影響を与えると考えられるため、確実に把握しておく必要がある。[石川愼吾委員]
- ・ 沈水植物は光合成の炭素源として炭酸水素イオンなどを利用するものが多く、コアマモもそうであると思われる。湧水には、遊離炭酸が溶け込んでいるため、非常に光合成に有利になる。蛸瀬川に湧水があれば、コアマモの生育に影響している可能性がある。[石川愼吾委員]

以上